Let's try ACP

実践ルポ

楽しいがいっぱい!

子どもたちに体を動かすことの楽しさを伝え、運動・スポーツに対する積極性を引き出すアクティブ・チャイルド・プログラム（以下、ACP）。日ごろの指導においてACPを実践することで、子どもたちの動きは生き生きしてくるはず。子どもたちを楽しく遊ばせるためのヒントを集めてみた!

連載〈第8回〉

大学に「ACPクラブ」誕生 子どもたちへ伝える運動遊びの輪

運動遊びを実践する「ACPクラブ」の立ち上げ

この春、岐阜大学で「ACPクラブ」と名づけられたクラブ活動がスタートした。「ACP」とは、もちろん「アクティブ・チャイルド・プログラム」のこと。依頼のあった幼稚園や保育園、時には小学校を訪ね、子どもたちとACPの運動遊びを実践するのが主な活動だ。

顧問を務めるのは、幼児期からのACP普及ワーキンググループの班員でもある春日晃章（こうしょう）同大学教育学部教授。活動の中心となるのは、春日研究室の大学院生および大学生だ。クラブ発足のきっかけを、春日教授に聞いた。

「昨年、（岐阜県）本巣市教育委員会の依頼を受け、市内にある8つの幼児園で、子どもたちにACPを実践しました。中心となったのが、私の研究室の院生、学生です。3人ずつのグループに分け、8つの幼児園で8回ずつ実施しました。その活動を見ていて、これは園児や幼児園、教諭だけでなく、学生にとっても非常に効果的な実践であると感じました。

特に、幼児と関わる機会が少ない教育学部の学生にとっては、貴重なチャンスとなったはずです。幼児を指導できれば、小学生も指導できるようになります。そして、運動遊びが子どもたちを笑顔にすることがわかったはずです。逆に、幼児たちはお兄さんやお姉さんが来てくれると、ふだん以上に動くようになります。また、幼稚園教諭や保育士にとっても、ACPクラブの運動遊びを見ながら〝こんな遊びがあるんだ〟〝こんな発展のさせ方があるんだ〟と、学んでもらうことができます。つまり、学生、幼児、幼稚園や保育園にとって、Win-Winの関係になるわけです。これは、私の研究室の学生だけではなく、教育学部のほかの学生にも広げたいと思いました」

監修／青野 博
日本スポーツ協会
スポーツ科学研究室 室長代理

写真／長尾里絵　イラスト／IKUKO

＊「ハンドレッド体操」は『幼児期からのACPガイドブック』に掲載されていません。興味のある方はYouTubeにアップロードされた春日研究室の動画を参照してください。
https://www.youtube.com/watch?v=PxuA_I7BB5c

本巣幼児園でのACP実践のスナップ。学生が子どもたちに運動遊びを伝え、子どもたちがお友達へ伝えていく

こうしてこの4月に立ち上がったACPクラブ。定期的に決められたミーティングはなく、スポーツ系や文化系クラブとの兼部が可能であることも特徴の一つ。幼稚園や保育園からACP実践の依頼があれば、そのイベントに参加できる部員が集まり、実践する運動遊びのメニューを考え、実践当日へ向けて練り上げていく。教育者をめざす学生にとっては格好の〝学びの場〟となるだろう。

初めてのACP実践 子どもたちの反応に一喜一憂

ACPクラブの初めての実践が、市立本巣幼児園で行われるということで、早速取材に向かった。昨年、ACP実践を行った8つの幼児園のうちの一つだ。

この日の実践は8人の院生、学生が参加。年長（5歳児）の2クラスの園児たちが、運動遊びで楽しいひとときを過ごした。紹介された運動遊びは、「＊ハンドレッド体操」「言うこと一緒やること一緒」「おさかなゲーム」「オニごっこ」の4種類。ふだんから保育士たちと運動遊びをしている園児たちは、お兄さんやお姉さんたちがどんな遊びを教えてくれるのかと、最初から目を輝かせていた。

リーダーを務めた学生たちは、実践の感想を以下のように語る。

「オニごっこを担当しましたが、子どもたちへの声かけに気を遣いました。ぶつかって転ぶ程度であれば、あまり干渉せずに、見守ることも大事です。また、オニが気になり、周りが見えなくなることが多いので〝前を向いて走ること〟を意識させました」（南輝良々（きらら）部長）

「子どもたちが帽子を脱いで、汗びっしょりの頭を見せてくれました。運動を楽しんでくれたんだと実感できました。今後は、少しずつ動きを変え、難易度を上げていって、多様な動きを引き出したいと思います」（濱口あずさ副部長）

「おさかなゲームでは、最初はクラス単位で遊び方を確認し、次にクラス対抗にしてみました。対決する楽しさも、運動遊びのだいご味の一つです。子どもたちは盛り上がってくれました。どういう段階を踏んで遊びを楽しくするかを考えるのも大切だと実感しました」（大坪健太広報担当）

この日、学生たちは大学に戻って、次回のACP実践に向けた反省会を開いた。この日のACP実践が、学生たちに大きな収穫をもたらしたようだ。

目標は100人規模のクラブ 多いほど運動遊びは広がる

本巣幼児園の豊田芳子園長が、昨年からことしにかけての運動遊びの成果について話してくれた。

「（ACP実践の）最初のころは、転んでも手が出ないので、ヒザや顔をすりむく子どもがいましたが、後半はずいぶん少なくなりました。転んでも〝大丈夫〟と言うようになり、子どもたちが変わってきたと思います。オニごっこでも、最初はカーブを曲がりきれない子どもが、後半になると体を上手に傾けて曲がれるようになりました。走り方が上手になったのですね」

本巣市内の幼児園では、ほとんどの園児が市内の小学校へ進学する。そのため、幼児園から小学校への連携は良好だそうだ。今春、卒園した年長組の子どもたちが、5月の運動会ではハンドレッド体操を大張り切りで披露したと、ほほえましいエピソードも聞けた。

ACPクラブに同行し、声援を送る春日晃章教授

子どもたちと積極的にコミュニケーションをとる▶

本巣幼児園を訪ねたACPクラブのメンバー

春日教授はACPクラブのもう一つのメリットを話す。

「ACPクラブの役割は、子どもたちと一緒に運動遊びすることだけではありません。遊びを子どもたちに伝え、伝えられた子どもが、ほかの子どもたちに伝えていくことこそ大切なのです。それが昔ながらの〝伝承遊び〟です。保護者世代からの遊びの伝承がうまくいっていない現状で、幼稚園や小学校は子どもが群れて遊べるいちばんの場所です。場所があり、仲間がいて、遊びの時間もあります。そこで、ACP実践を行うことが最も効果的なのです。ACPクラブで学んだ学生たちが、将来、幼稚園や小学校の先生になったときに、それが体育の授業や休み時間で生かされるはずです。そのためには、いろいろな学生に入部してもらうことです。100人規模くらいのクラブにしたいと思っています。みんなでさまざまなアイデアを出し合ったほうが楽しいし、遊びのバリエーションは増やせます」

広報担当の大坪さんは、ACPクラブの今後の広がりについて、こう話してくれた。

「ACPクラブをぜひほかの大学でも広めたいと思います。名称や形態は違っても、ACPクラブ的な発想のクラブができてきたら、ほかの大学のクラブとも一緒に活動してみたいと思います」

そうなれば、ACPクラブの〝伝承〟が、すなわち運動遊びの〝伝承〟につながっていくことになるだろう。SJ

ACP ここがポイント!

ACPクラブによる本巣幼児園での運動遊びから、参考になるポイントを青野先生に解説してもらった。

『幼児期からのACPガイドブック』4章「幼児の指導法・指導技術」〜「良い指導者としての観点」（QRコード参照）から、3つのポイントについて注目しました。

◉いつも元気で楽しい雰囲気をつくる

学生さんたちは、会場入りすると真剣な表情で打ち合わせを行っていました。なかには初めて子どもたちの前に立つ学生さんもいたようで、当初は緊張の面持ちで子どもたちを迎えていました。ところが、子どもたちの前に立つと、まるでスイッチが入ったように、笑顔でハキハキとした口調で子どもたちに話しかけていました。実は、子どもは指導者の雰囲気を敏感に察することがあります。そのため指導者は、ちょっとした表情やことばづかいにも配慮することが求められます。学生さんたちは、それを十分に理解していたようで、あえて大げさな身ぶり手ぶりで説明し、子どもたちの注意を引きつけているようでした。そして、何よりも学生さん自身が子どもと一緒になって遊びを楽しもうとする姿勢が見て取れました。

子どもたちの前で元気で楽しい雰囲気をつくる

◉心の発達や社会性の獲得にも配慮する

遊びを実践した後、学生さんに指導内容を振り返ってもらったところ、①子どもたち一人ひとりに声をかけて積極的にコミュニケーションとスキンシップを図ることができた、②ルールを確認する際は子どもたちから声を引き出すことができた、そして、③子どもたち自身が頑張ろうとする意欲が引き出せた、といった感想が聞かれました。ACPの実践により、体力・運動能力の向上だけでなく、意欲的な心の育成や社会適応力の発達といった効果も期待されます。学生さんたちは、まさにこうしたACPの趣旨を理解したうえで子どもたちの指導に臨んでいたことがわかります。なお、子どもと接する際は、指導者からの一方的な指示・命令で管理しようとするのではなく、子どもと共通認識をもつために約束をする、時には見守ることで、子どもの自律を促そうとする姿勢が求められます。

積極的にスキンシップを図る

◉異年齢交流を積極的に利用する

今回は、学生さんが幼児と一緒に楽しく遊ぶ様子を取材しました。ですが、ACPクラブは、単に学生が子どもと一緒に遊ぶことよりも、この取り組みを通して子どもたちに遊びを伝えることで、日ごろから子ども同士で遊びを実践してもらうことを目的としています。特に、この機会に参加してくれた年長組の子どもたちには、今後は年下の子どもたちに遊びを伝えることが期待されます。子どもは憧れのお兄さん、お姉さんにしてもらったことを、今度は自分が年下の子どもにしてあげたいと思うものです。そのため今回は、①特別な道具を必要としない、②ルールがシンプルな遊び、そして何より、③学生自身が遊びの伝道師であることを自負する、ことを意図して遊びに臨んでいました。最後に学生さんが子どもたちにあいさつする際、実践した遊びを年下の子どもたちにも教えてあげるよう促していたことがとても印象的でした。

×（こんなことをしてはいけません）の身ぶりでルールを確認

ACPクラブのおそろいのTシャツ。背中には「遊びの伝道師」の文字